

ハーレム・ノクターン

私は今日、すこしおめかしをしてお出かけをする。黒地に大きなピンクの薔薇をあしらったジョーゼットの、ノースリーブのロングドレス。その上に、ベージュのレースのボレロを、袖を通さずに肩に羽織る。イヤリングは、思いつきり長く垂れ下がって揺れる銀色の輪。ネックレスもそれなりだ。ただハイヒールははけない。これまで、いつも七センチのヒールの靴をはいていたなんて嘘のようだ。幅広の、留め金のついた、いささか野暮ったい靴で我慢することにする。姿見の大きな鏡で点検をする。この一〇年ほどでびっくりするほどしまりのなくなった体のそこかしこは、どんなデザインのドレスを着ても隠しよりのないほどの贅肉に覆われ、崩壊してしまった。年齢の経過の残酷さをあからさまになぞっている。

おまけに戸外は七月の太陽が、容赦なく汗ばんだ皮膚のそこかしこの「染み」を浮き上がらせる。化粧の厚塗りは皺を目立たせる要因だとわかっていても、そうせざるを得ない。私は、黒、赤、黄色など、さまざまな色彩のゴブラン織りのポーチを肩にかけ、今日のダンスパーティーに招待してくれた友人へのプレゼントがはいった伊勢丹の紙袋を持って戸外にでる。中身はドイツのブランド、「フェーラー」のバック。

まぶしくきらめく太陽。真つ蒼な空。まるで地中海のような青さだ。七月でこんなに澄み切った空もめずらしい。まぶしさに、思いつきり目じりに皺をよせて、ながめてしまっ

た。自宅から駅まで歩いて一五分、おそらく、せつかく塗りこんだ化粧は半分ぐらい崩れるだろう。バスに乗ることにして歩き始める。白いレースの日傘は、あまりにもこじんまりと華奢で、おびただしい日光を防ぐのに役にたちそうもない。

電車に乗って二十分、この近隣では一番グレードのたかいホテルのダンスパーティーに出席するのだ。駅前の花屋で、真紅の薔薇の花束を作ってもらおう。これもプレゼントのもの。今宵、花形で踊る友人は薔薇が好きだから。

ホテルのロビーの暗い照明にほっとする。ダンス会場はもつとほの暗い。ミラーボールの刺すような光が、稲妻のように交差する。あらゆる年齢の人たちがコンプレックスを抱かずに過ごせるような照明は、ホテルという多数の人々が集まる場所での「おもてなし」の表れであろう。三階の会場ではもう音楽がながれ、絨毯の上に、そこだけ板敷をしたフロアで踊っている人たちがいる。八人用の円形のテーブルが十四、五ほどフロアを囲んで並んでいる。私の名前で指定されたテーブルを探し、やっと一息つく。

一〇年ほど前まで、長い間、レッスンに通った「ダンススタジオ」の、年に一度のダンスパーティーである。主として個人レッスンが中心のプロの教室のパーティーはメインイベントとして、生徒のデモンストレーションが見せ場の一つだ。個人レッスンに励んでいる生徒たちはここぞとばかりにドレスやメイクに気を使い、普段の練習の成果を披露する。社交ダンスを趣味とする人たちは、その楽しみ方はいろいろであろう。公民館などで、ヴァリエーションを主として、ステップを踏みながら、カップルが音楽に合わせて踊って

楽しみ、コミュニケーションをはかるという、もつともポピュラーなやりかたがある。あるいは競技会を目的として、ダンスの技術を磨き、ひたすら上級にあがることを目指すポーツダンス、そして私もそうであったが、プロのダンス教師の個人レッスンをうけ、身体の基本的な動きを学び、年に一度のパーティーのデモンストラーションで、先生と踊ることを目的とするというもの。

ダンスの上達を目標として毎日を生きていたといえ、プロでもないのにと蟹蹙を買うかもしれない。とんだ有閑マダムのお遊びと思うかもしれない。しかし私はもちろんお金もちの有閑マダムではないし、自堕落な生活をして享樂に身を亡ぼすほどの信念などない平凡な主婦として暮らしてきた。ただ踊ることが心底好きなだけだ。

幼児のころから踊ってばかりいたという。将来の夢は踊り手になるのだと口癖のようにいつていたという。

夢は、夢でしかなかった。女性としてごく普通の結婚をした私は、四〇歳を過ぎたとき、子育てのピークがおわって、身辺のしがらみから解放され、「今でしょ」の、その時を迎えたのだ。長年眠っていた「ダンス」への熱望が再びよみがえったのは人生の後半生に近づいてからであった。

あらゆる芸術の中で、ダンスが最高の自己表現だと信じていた。音楽、絵画、文学より

も、肉体をもって演じるダンスの表現に惹かれた。

「世の中には二種類の人間しかいない。踊る人間と、踊らない人間だ」と作家中山可穂は小説『サイゴン・タンゴ・カフェ』のなかで書いている。「たった一回踊ってしまったために人生を棒に振った人たち」のドラマチックな物語を描いた小説だ。タンゴダンサーだったプロの殺し屋、タンゴに出会ったためにヴェノスアイレスに行ってしまう若い娘。メコン川のほとりでバンドネオンをひく女。放浪の果てにサイゴンの場末でタンゴカフェを開いている、行方不明といわれていた流行作家の秘密。全編にピアソラのバンドネオンが響いているようなタンゴの輪舞。

私も社交ダンスの十種目の中でタンゴが一番好きで、中山作品に描かれているように時として「暗い情熱」に突き動かされることがあったが、一瞬の波紋のように心を横切っただけで、「道を踏み外すことなく」どうやら普通の主婦として人生を全うしそうである。

フロアで仲間たちが円を描いてワルツを踊っている大きな流れを、ぼんやりとながめる。四十年間、熱中してきた社交ダンスをあきらめざるを得なくなつた数年前のアクシデントのことを思いだす。それは思い出すのも苦痛な、致命的な転倒事故であった。

恒例の、ダンス教室のパーティが近づいてきたある日、レッスンの最中に、三〇代のI教師が、「今度のデモで、ルンバの曲で「ハーレム・ノクターン」を踊ってみない？」とさりげなく言った。一瞬どきっとした。彼はとても若い。いつもデモで踊る選曲は現代風

の 私などあまりなじみのない曲が主だったのに、昭和三十年代に全盛だったサム・テラーの「ハーレム・ノクターン」とは。私の中で深く渦巻くものがあつた。七〇歳の身体の底を鋭く官能が貫いた。

——黒い闇の中で、そこだけが黄色いライトの舞台のなかで、鋭くスリットのはいった黒のドレスを纏つた黒人女性が「ハーレム・ノクターン」を踊つていた。場内に響き渡るテナーサクスの絞り出すような音量——。昭和三〇年代、キャバレーという娯楽施設があつた。ホステスが男性客を酒などでもてなすのだが、健全な店であり、当時よく会社の接待の社交場に利用されていた。たいてい円形に設えたホールの真ん中に舞台があつて、酔客への余興として、様々なショーが繰り広げられていた。ほとんどが男性客である。しかし、上司でしばしば私をその店に連れて行つてくれる人がいた。二階の席にショーだけを楽しむ場所があり、私はショーが見たさに彼のあとについていくのが楽しみであつた。ネオンサインをまきつけた外観も豪華であつた。きつと、高級な店だつたに違いないが、平成も四半世紀過ぎさつた現在「キャバレー」という呼び名の店でさえ、あまり存在しないようである。

私の記憶に鮮明に残っている店の名は「コパカバーナ」。日比谷よりの新橋の駅に近かつたと思う。二階の客席の隅に、舞台を見下ろすのに絶好の場所があつた。女性の私に相手をしてくれるホステスはいないし、酒を飲まない私は上司には関係なく、ひっそりと二

階のほの暗い座席に座ってスポットライトを浴びて登場するダンサーにくぎ付けになっていた。

当然、ストリップショウなどではないが、ダンサーが醸し出す雰囲気はまさに淫靡であり腰のあたりまでスリットの入ったドレスはセクシーそのものであった。「ベサメ・ムーチヨなどを情感豊かに踊った。

私にとって彼女たちはいわゆる「ショー」を見せるダンサーではなく、アーティストそのものであった。そして極め付きは黒人女性の「ハーレム・ノクターン」。彼女は黒いつややかな肌にまとわりつく漆黒の、縮れた長い髪を振り乱し、挑みかかるような瞳で客席をにらんでいた。彼女の細身のシルエットのしなやかな動きは私を魅了した。私は「彼女でありたい」と切望した――。

「彼女でありたい」という切望は高齢になった今、かなえられそうだ。家に帰ってさっそくCDで聴いた。さまざまな情景が渦巻いた。

ニューヨーク、マンハッタン街のハーレムに集う人たちの闇、そしてまた闇の深い底から湧き上がるノクターンの調べ。サム・テーラーのサククスは、うめくように、叫ぶように、私の胸をわしづかみにする。

ダンスに必要な肉体のばねがとうになくなっていくことも、「思い入れ」だけではどうにもならないハンデティも、もちろん意識している。踊りを習い始めたときすでに、肉体はピークを過ぎていたのだ。日常の時間帯に余裕ができたから、というありきたりな理由

で習い始めたダンスであった。しかし私の筋肉は年齢よりも柔軟でスタンダードにおけるホールドの姿勢や、ラテンのウオークなど、基本はある程度マスターすることができ、それなりに先生にも認められ、楽しんできた。五〇歳、そして六〇歳になっても自分を訓練しさえすれば大丈夫と信じていた。七〇歳すぎて、踊った後の疲労感、バランスの乱れに苦しむようになってはじめて真底から蝕んでくる肉体の「老化」という現実突き当たったのである。年を経ることに老成していく他の芸術とちがって肉体に頼らざるをえないダンスの致命的なさだめである。

もう「大勢の人の前で踊るデモンストレーション」は無理だとあきらめかかっていた。そんな私を動揺させたアメリカのテナーサククス奏者サム・テラーの「ハーレム・ノクターン」。

若い時からジャズを聴いて、ブルースを聞いて、夜の巷を彷徨ってきた私の、それはまさにもう私のダンス人生では二度とない、最後のチャンスだとおもった。

私はデモに出演することをOKし、すぐにレッスンに入った。振付のうまさにかけては定評のあるI先生である。何かを掴もうとするように、腕を大きく広げ、薄暗い街灯の陰にたたずみ、なすこともなく、あたりを見回す女のけだるさ、通りがかりの男が私をリフトする。私は男にささげられて宙に舞う。スラムの街をただよう女たちの退廃のムードを出したいと思った。まぶしい若さでは表現しえない、熟しきって枯れていく年老いた女の悲しみのようなものがにじみでればと思った。

そのころ（現在もだが）、私に家族はなく、毎日の時間はまったく私の自由になっていた。家にいるときでもいつもCDで「ハーレム・ノクターン」を聴き、音程を外さないようにリズムの研究をしていた。まさに毎日がダンスのための日々、日々、明け暮れ、思いがけない充実した日々はすぎ、秋は深まっていった。

事故は突然やってきた。当時、私は自転車を愛用していた。徒歩で一五分はかかる私鉄沿線の駅までの往復や、スーパーへの買い物などすべて子供の時から使い慣れた自転車であった。自分の足のようなもので、その運転に何の不安はなかった。その日も、ダンスのレッスンのために駅に向かったのだが、いつもは練習用の、フレイヤーのたつぷり入ったスカートバックにいられて持参し、教室の更衣室で着替えをするのだが、それが面倒になり、自宅から着替えていくことを思いついた。練習用だといってもダンス用のドレスであるから、特殊なデザインでおびたらしい襷がたつぷりと入ったロングスカートである。しかし、駅までは人通りの少ない路地があるし、コートを羽織ればあまり気にならないと思い、気軽に自転車に乗った。

走り出して五分に満たないころ、突然、快調にスピードをだしてすべっていた自転車に急ブレーキがかかり、勢いよく横転した。私はコンクリートの道路に抛りだされたのだ。我ながら理解しがたいことであったが、肩の痛みもさることながら、起き上がろうとしても起き上がれない。やがて理由が分かった。気が付かなかったのだが、スカートのすそが

後ろの車輪に巻き付いてしまい、車輪が動かなくなつて転倒したのだ。路地で人通りの少ないのが幸いなような、でも手助けをしてくれる人がいないと、自分の力だけでは立ち上がることもできない。痛みをこらえて必死に車輪に絡みついたスカートを解こうとしてみると、たまたま中年の女性が通りかかった。私の苦境を察して彼女は、「あらあら大変」などと言いながら、車輪に食い込んだスカートを引っ張り出すのを手伝ってくれた。まさに救いの神と深く感謝し、よろよると自転車を押しながら、自宅に引き返した。

痛い。ジンジンと痛い。肩を出してみると、黒々と内出血をしている。これはただ事ではないとおもい、それでも駅前の整形外科医院まで歩くことができた。

レントゲンの結果は「鎖骨骨折」であつた。胸一面にあざが広がつて重病人の心境である。幸い複雑骨折ではなかつたので、手術は免れた。というより、もう年配なので形にこだわることもないだろうから「鎖骨ベルト」で胸を固定して自然に骨がつながるのを待つ治療法を選んでくれた。

それから三か月間、私は「鎖骨ベルト」で腕と胸をきつく固定するベルトを上半身に巻き付け、寝るときも外すことができず、入浴は半身浴でまさに身障者の気分を味わつた。一人で暮らしているので、下着の着替えもできず、一日おきに整形外科の看護師さんにお世話になるために通院した。固定していると痛みはないのだが、洋服で隠しても盛り上がった肩の線は露わであり、気分のすぐれない日々。秋から冬へと季節が移り変わるほどの三か月間、成すこともなく、自分だけの世界に閉じこもつた心境の長い、長い歲月であつ

た。

三か月たってレントゲンの結果、無事折れた鎖骨が繋がったと知った時の解放感は、重病を克服したときの荘快感で思わず友人に電話をかけたほどであった。しかし腕を自由にうごかすまでにはもつと歳月を必要とし、私は執着していたダンスパーティーのデモンストレーションを諦めざるをえなかった。そのことが引きがねになって、私の身体は一気に崩壊していく。

「今日は来てくれてありがとう」パンダのように目の周りをアイシャドウで隈取り、つまづけを二重につけて大げさに化粧をした友人がニコニコしながら近づいてくる。胸元を大きく開け、スパンコールの施された鮮やかなドレスを身に着けている。「おめでとう」私も彼女に負けない微笑みで応じる。一〇歳ほど私より若い彼女と、もう二〇年にわたるお付き合いで一緒にレッスンをうけてきた。彼女は残り、私は教室を去ってもう数年になる。今夜は彼女の晴れの日、彼女のデモを観るために私はパーティーに招待されたのだ。ワルツを踊るといふ。

「どう？ デモの仕上がりは」「だめなの、ヴァリエーションを覚えるだけで精一杯、つぎつぎにステップを踏むのが大変、I先生の振りつけはほんとうに難しい、バランスを崩すし、スイングをきれいにするほどもう足は強くないし、私もデモは今年が最後かもしれない。長いこと見に来ていただいたけど、来年は出来そうもないの」小声でしんみりと

つぶやいた。

そうだった、彼女も60をとつくに過ぎていた。いかにアマチュアのダンスとはいえ、やはりお客に見てもらって見苦しくない程度のテクニクの技が必要である。それができなくなったら消える以外にない。踊る本人が一番よく自覚している。

アマチュアなりに自分に納得のいく踊りがしたいのだ。気休めを言って慰めはしない。

彼女と踊った日々が突風のように私の内部を吹き抜ける。デモの日が近づき、二人でCDラジカセをかかえ、郊外の原っぱにでかけて何時間も練習しあったこと、音量で近所に迷惑をかけることをはばかったのだ。

ダンスホールの設備をもつ河口湖半のホテルに泊まりがけでかけ、ホテルが女性客のために用意してくれているダンスの相手（その男性を、リボンちゃんと言ぶ）にエスコートされ、ラテン、モダンふくめて十種目に及ぶヴァリエーションを踊りまくったこと、近郊の市にある行きつけの小さなダンスホールで、マスターに相手をしてもらい閉店まで踊ったこと。ホールのオーナーのママは私より数歳年長だったが、「死ぬまで踊りましょうね」と二人で約束した。命が終わるまで――。七〇代の男性が、ダンス教室でレッスン中に心筋梗塞で倒れ、そのまま逝ってしまったということが話題になったことがあった。肉体の限界まで使い切ったのだろう。私もそうでありたい。魂を失った私が床の上に横たわっている幻想。

透明なフラッシュのなかに浮かび上がる一緒に踊った何人かのタキシード姿のパート

ナーたち。その思い出は私の奥深く沈んでもう姿を現すことはない。

本当に今夜がラストチャンスであった。私は立ち上がった。自分の履いている靴を恥じたが、そんなことはどうでもいい。中央に設えたホールにでていった。大学のダンス部の学生であろうと思われる若いリボンちゃんに近づいていった。

「踊ってくださいませんか？」額にうつつすらと汗をかいていた童顔の若者は驚いたように私を振り向いた。パーティーが始まった当初から一曲も踊らずただ眺めていただけの私が突然近づいて行って申し込んだのだ。

「ええ、勿論、お願いします」彼は私をホールの空いている場所にとエスコートした。私は何年ぶりかでモダンダンスのホールを組んだ。「お上手ですね」。汗ばんだ体臭をじつとりと匂わせて若い男性は言った。「そう、長いこと踊ってきたから、キャリアはあるの。でも今夜でおしまい。」「え？」彼はきよんとしていった。「もう年だから……」「そんな」彼は笑った。「本当にダンスが好きな人は年なんて関係ないですよ。倒れるまで踊るんですよ」そう、倒れるまで――

私は明日倒れても不思議はない。声にならずにつぶやき、彼の肩にもたれて踊った。タンゴは死の舞踏であった。身体中から力が去っていく。やがてフロアに私の亡骸があった。私は今、この時のためだけに在る。踊りつかれた私のこの一瞬の、愛に包まれた死……。

(三〇一五年一二月)